

シェイクスピア狂言の初演を巡って

佐々木 隆

プロローグ

シェイクスピア狂言の研究については、滝静寿著編『シェイクスピアと狂言』（新樹社、一九九二）が出版されている。筆者自身も「シェイクスピア狂言について」の論文のほか、資料編を編集し、深く係った経緯がある。この時点でのシェイクスピア狂言の初演は『ぢやぢや馬馴らし』（一九七六年四月十日、宝生能楽堂）とした。今回、新たな見直しの中で初演について新しい事実の発見があった。ここでは調査途中の経過報告としたい。

一 三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』研究

滝静寿編『シェイクスピアと狂言』（一九九二）と佐々木隆「日本の伝統芸能と最近のシェイクスピア

劇上演』（一九九二）の研究内容は、三宅藤九郎『藤九郎新作狂言集』（一九七五）、和泉元秀『狂言を観る』（一九八三）、和泉元秀舞台監修／井上喜代司写真『狂言師―人間国宝三宅藤九郎』（一九八五）の資料を中心に展開されてきた。これまで三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』に関する初出乃至初演については次のようになる。

一九五二年七月 三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』発表（発表掲載誌不明。その後『藤九郎

新作狂言集』能楽書林、一九七五年六月に収録）

一九七六年四月十日 三宅藤九郎『ぢやぢや馬

馴らし』（水道橋能楽堂）

その後、九世三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』に和泉元秀（一九三七・一九九五）が演出を施して、和泉元秀『ぢやぢや馬ならし』、さらに荒井良雄（一九

三五）により原語シェイクスピア狂言が誕生している経緯は前述の研究書、研究論文で論じられている通りである。未だに三宅藤九郎の『ぢやぢや馬馴らし』がどのような経緯で成立したかは不明であるが、一九五二年はまさに能楽復興期であり、九世三宅藤九郎（一九〇一・一九九〇）、飯沢匡（一九〇九・一九九四）、木下順二（一九一四・二〇〇六）等は新作狂言でよく名前が挙げられる作者である。

二 九世三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』の初演

これまで実際の演者である和泉元秀の『狂言を観る』等から初演を一九七六年四月十日としていた。拙著のシェイクスピア劇上演年表もこれに基づき一九七六年四月十日としてこれまで作成してきた。しかし、現在シェイクスピア劇上演年表の見直しをしている中で当時の記録から次のようなことがわかってきた。問題は上演の月日である。それぞれ根拠と

なっているものを併記しておきたい。時系列により仮にA説からC説を設定し、月日のうち、日付の入っていないものは別表記とする。

A説 一九七六年四月十日

和泉元秀『狂言を観る』（講談社、一九八三年九月）

B説 一九七六年四月二十日

『能楽タイムズ』（二八七号、能楽書林、一九七六年二月）

*「五一年度和泉例会シリーズは昨年上梓された三宅藤九郎『藤九郎新作狂言集』から上演。まず第一回の二月十七日は『だまり鶴』、第二回四月二十日は『ぢやぢや馬馴らし』、第三回六月十五日の曲目は未定である」との記事がある。

・『能楽タイムズ』（第二九〇号、能楽書林、一九七六年四月）

※記述が一九七六年四月となっているもの

・『能楽タイムズ』（第二八八号、能楽書林、一九七六年三月）

・「新作狂言一覽」（古川久・小林貢編『狂言辞典』東京堂出版、一九八五年十一月）

・松本雍「新作狂言年表」（『楽劇学』第十一号、楽劇学会、二〇〇四年三月）

C説 一九七六年六月十五日

・『華泉』（第二十六号、和泉方華泉会、一九七六年六月）

*「和泉会（四月二十日）は交通ストのため中止」との記事がある。

・『能楽タイムズ』（第二九二号、能楽書林、一九七六年六月）

・『能楽タイムズ』（第二九三号、能楽書

林、一九七六年八月）

* 「水道橋能楽堂での第四回和泉会
は四月交通ストで中止になった分」
との記載がある。

四月十日とあるのは和泉元秀『狂言を観る』（一九八
三）を基にしたもので、本来は四月二十日が初演の
予定であった。しかし、この日が交通ストのため、
中止となり、結局、『ぢやぢや馬馴らし』は六月十五
日に上演されたことが様々な資料から明らかになっ
た。演者自身が四月十日としている可能性は二つあ
る。第一に本来の四月二十日を誤植して十日として、
以来それがずっと使用されている。第二は十日は公
開しないが試演のような上演を行い、その日に撮影
したものがそのまま使用された。（写真等も掲載され
ることが多い）しかし、後者の場合には公開性がな

いとすれば、初演として四月十日とするにはやや無
理があるのではないかというのが今回の調査結果で
ある。四月二十日説についてはストで中止になった
が、それまでの宣伝や告知からその日程がそのまま
記載されてしまったということが推測できる。この
流れは『能楽タイムズ』を時系列で確認することに
よって確認できた。従って六月十五日が三宅藤九郎
『ぢやぢや馬馴らし』初演となる可能性が高い。今
後、シェイクスピア劇上演年表の作成においても修
正が必要となる。また、配役については和泉元秀
とあるのは当時は和泉保之の芸名であるため、保之
での表記がふさわしいことになる。また、同様に会
場についても上演年表等によつては宝生能楽堂とあ
るが、当時の名称は水道橋能楽堂である。水道橋能
楽堂は一九五〇年に再建され、一九七九年に改称し
て新装開場し宝生能楽堂となった。従って、一九七
九年以前・以後で会場名の名称が異なる。

三 片山博通『二人女房』

これまでシェイクスピア狂言は三宅藤九郎『ぢやぢや馬馴らし』（一九五二年七月発表、一九七六年初演）としてこれまでの研究はなされてきた。しかし、

二〇一二年八月段階においてシェイクスピア狂言の研究調査・研究を行っている国際融合文化学会員・菊地善太により三宅藤九郎以前の片山博通（一九〇七・一九六三）による新作狂言『二人女房』（一九五二年六月七日初演）が確認された。初演年月日においては一部の資料において六月十七日あるが、菊地の調査により六月七日初演が明らかになっている。『二人女房』は『観世』（第二十巻第六号、絵書店、一九五三年六月）に掲載されている。目次では片山九郎右衛門、本文では片山博通となっている。なお、附記として次のように記されている。

この台本を執筆するに就て、茂山千之丞氏のひ

とかなならぬ御協力を仰いだ。記して感謝の意を表す。又、この狂言は、茂山千五郎氏などによつて去る六月七日、京都で初演されたのである。

『二人女房』が『ウインザーの陽気な女房たち』であることは記されていない。片山自身は『能楽タイムズ』（第二十四号、能楽書林、一九五四年三月）の「新作狂言について」において「シェイクスピアの『ウインザーの陽気な女房たち』から筋を盗んで、二人女房を作り上げた」と記している。こうした翻案については作者自身はつきりと記しているかも知れない重要なこととなる。シェイクスピア狂言『二人女房』について、菊地は『二人女房』が『ウインザーの陽気な女房たち』の翻案であることを含め、その分析に着手している。なお、『二人女房』については現在、再演された記録がないことも残念な状態である。筆者自身も今後、詳細な分析を行いたいと考え

ている。

エピソード

三宅藤九郎のシェイクスピア狂言『ぢやぢや馬馴らし』の初演日の確認をしているうちに、菊地善太が三宅藤九郎に先行する『ウインザーの陽気な女房たち』翻案、片山博通のシェイクスピア狂言『二人女房』（一九五二年六月七日初演）という新しい事実を発見したことを知った。これはインターネット検索では到底辿りつくことのできない現物主義による資料確認によるものだ。シェイクスピア狂言研究は菊地善太「シェイクスピア劇と狂言の出会い―新作狂言『二人女房』と『ぢやぢや馬馴らし』について―」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第十三号、二〇一一）をはじめ、研究が深められることが期待されるが、片山博通に関する研究はもちろんのこと、それぞれの創作過程の分析、さらには一九

五二年に何故ふたつのシェイクスピア狂言が誕生したのか、その分析も大きな課題が残されている。狂言は歌舞伎、能とは異なり台詞劇という大きな特徴を持っていて。狂言の国際化、グローバル化、グローカリゼーション時代の演劇を考えていくと、西洋演劇と日本の伝統芸能の融合という観点は今後さらに注目されるべきものだ。